

「水本」でセクト運動へのめり込み

本部を策す
反動分子

日刊 動労千葉

80.8.14

全国版
No. 63

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（電話）二九三五・六・八（公衆）〇五五（22）七二〇七

△△△△△△△△

全国の動労組合員のみなさん。
われわれは第三六回全国大会方針に見られる「本部」反動分子の運動的、組織的破産の実態について、「千葉再建策動の破産」「反合闘争放棄・三五万人体制への屈服」という側面から明らかにしてきました。
今回は、労働運動としての展望が全くないが故に、「水本」を通してより一層革マルセクト運動に転落してしまっている実態を見たいと思います。

△△△△△△△△



「真の革新政党との共闘」なるものの実態は!?

第三六回全国大会方針案は、中央執行体制について「政治部」を独立させ①目黒選対に結集した組合、労働者

・農民との連帯の強化、②「動労と連帯する会」の事務局としての強化、③動労議員懇との共闘の強化、をその任務の「三本柱」とすることを明らかにしています。

また、この方針案では「動労と連帯する会」と「水本事件の真相を究明する会」をセットにして「強力に推進する」ことが各所で強調されています。

そして、社会党、総評や各単産指導部に対しては、「高度成長ボケ」「厚化粧」「確力の手先」「ヤレなくなった」等々、自らの品性下劣な本性をそのままに、自らが闊つたという裏付けのないまま、極めて評論家的にバリ雑言を投げかけ、結論的には「真の革新政党との共闘を追求する」となっています。

「政治部」を窓口とする「水本」運動

このことの意味は重大です。

「政治部の三本柱」の中に社会党という文字が全くないことや、「動労議員懇」と言っても「本部」反動分子が口を極めてのりしる「社公路線推進派」がそのメンバーの大半を占めていることなどを総合すれば、この間の反動分子のやり方から見て、政治部は動労としての従来の社会党中心の政治共闘路線をなし崩し的に放棄し、「動労と連帯する会」の事務局として純化し、動労運動全体を「水本」を中心とする特定セクトの翼賛運動にすり替えてゆくための窓口として機能してゆくことは目に見えています。

「三里塚に一線を画した」が故の孤立

「三里塚に一線を画した」が故に、今日、反公害、反原発、反基地などを闘う住民運動、農民運動などから動労が孤立化せざるを得ない実態が、全国各地にあり、本方針案の中へ「総評、社会党の方針で三里塚を闘う」などと、とってつけたように挿入しても、誰からも相手にされないことも当然です。

この方針案における反動分子のねらいは、そのような中で、あたかも、動労の運動が支持されているがごとく組合員をごまかし、ひきまわすための場として、「水本」へより深くのめり込み、特定のセクト運動に動労の闘いを引き込んでゆくということなのです。

「単なる賛助団体」であつた動労が、今日では「財政的にも、集会の動員でも、日常的事務局体制としても」「水本」を支えている」といわれる実態になっているのです。

「水本」に対する全国動員を心から支持する組合員が何人いるのでしょうか。

「水本」に莫大な組合費を投入することを承認する組合員が何人いるのでしょうか。

「真の革新政党と共闘」するというその党派とは具体的に何なのでしょいか。

組合員の反対意見を「指令」と暴力で封殺してゆく典型として、今日「水本」があるのです。

「本部」反動分子に動労の未来を託すことはできない。

全国の動労組合員のみなさん。

このような「水本」をもつてする動労運動のセクト的引きまわしを断固拒否し、反合闘争をまともに闘い、反戦・政治闘争や賃金闘争をまともに闘う労働運動を、当面する「五五・一〇」粉砕を基軸に創造してゆくにはありませんか。

「五五・一〇」や「乗務員運用合理化」を「当局の武装親衛隊」として卒先推進する反動分子の路線に、動力車職場の未来を託すことはできないのです。